銅銭（1～3）　1・2：皇宋通宝。3：元豊通宝。

いずれも検出面からの出土である。3点とも完形で良好な状態である。

図72　銅銭拓影（S＝2：3）

5　木・骨製品　（図73）

櫛状木製品（1）　櫛状部と基部右側の一部が欠損する。基部には孔が2個対で側面を切って開けられている。櫛状部は断面から7～8本に削られたものとみられ、特に裏面からは、櫛状に削る前に斜めに削り、全体を薄くしていることがみられる。

ヘラ状木製品（2）　下部と上部の一部を欠損している。上部は三角形に造られ、中央に穿孔がされる。表面は全体に磨かれており、滑らかである。

鹿角加工品（3）　ＳＫ7より出土。長さ11.8cm、径約2.8cm。両端は面取りがされ、片方を2.6cm残し反対側が半分程になるまで斜めに切られている。切断面では中央の海綿状の部分が取られ空洞となる。切られている面では縦方向に磨いた痕が見られ、切られていない部分には横方向の刻みが入れられている。

覆土中から人骨とともに割れた状態で検出され、接合したものである。このため故意に破砕されていた可能性も考慮される。

ト骨（4）　土坑内からバラバラの状態での検出であった。この内一部接合する箇所もあるが、遺物の性格上故意に破砕されていた可能性が高いものと考えられる。

幅1.7cm、厚さ0.25～0.3cm。内面、外面ともに丁寧に磨かれ、一方の先端を尖らせている。約1.0×0.5cmの長方形の鑽が彫られている。全体の厚さの約半分の深さがあり、2段に掘られている。一部を破損しているが、鑽は等間隔に4箇所あると推定される。

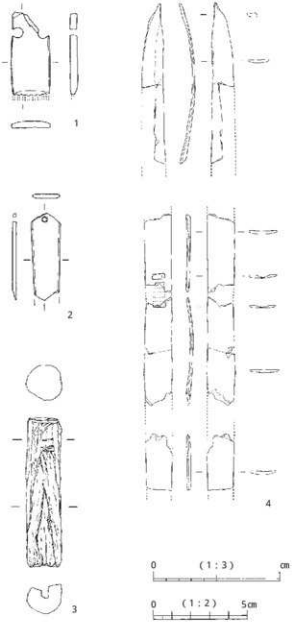


図73　木・骨製品実測図
（1・2：S＝1：2、3・4：S＝1：3）

表3　遺物一覧表

出土位置		土器			他遺物	
区	遺構	出土総量（g） 実測個体数	器種概要	図版	種別 （実測個体数）	図版
A	1号住居 （SB1）	10,440 土師器:5	高坏、鉢、甕	図49－39～43	石斧（1）	図68－2
A	2号住居 （SB2）	3,330 土師器:2	甕	図49－44・45		
A	3号住居 （SB3）	7,720 土師器:2	甕	図49－46・48		
A	4号住居 （SB4）	7,300 土師器:1	高坏	図49－47		
A	5号住居 （SB5）	21,420 土師器:5	坏、高坏、甑、長胴甕、鉢	図49－49～51 図50－52～56	砥石（1） 土製支脚（1）	図69－10 図67－19
A	6号住居 （SB6）	9,170 土師器:1	坏、（青磁）	図50－57		
A	7号住居 （SB7）	6,810 土師器:5	坏	図50－58～62	土製円板（1）	図67－7
A	8号住居 （SB8）	20,970 土師器:15	坏、鉢、長胴甕、壺、甕	図51－63～77		
A	9号住居 （SB9）	9,800 土師器:7	壺、甕、甑	図52－78～83 図60－205		
A	10号住居 （SB10）	22,630 土師器:5、（弥生:1）	高坏、甕、（壺）	図52－84～89		
A	11号住居 （SB11）	3,750 土師器:4、須恵器:1	坏、甕、鉢	図60－206～210	砥石（1）	図68－9
A	12号住居 （SB12）	9,920 土師器:7	坏、高坏、甕、壺、鉢、	図53－90～96		
A	15号住居 （SB15）	6,850 土師器:4	坏、高坏、台付甕	図47－1～4		
A	16号住居 （SB16）	48,590 土師器:41 須恵器:1	坏、鉢、甑、長胴甕 甕、壺	図53－98・99 図54－100～125 図55－126～136 図56－137・138・140	ミニチュア土器（1） 土製円板（1） 土製品（1）	図67－1 図67－9 図67－18
A	6号土坑 （SK6）	4,740 土師器:13	坏、椀	図60－213～225		
A	25号土坑 （SK25）	6,110 土師器:3	皿	図60－237～239		
A	26号土坑 （SK26）	7,970 土師器:2	坏	図60－234・235		
A	28号土坑 （SK28）	7,660 土師器:2、須恵器:1	擂鉢、坏	図61－240～242		
A	30号土坑 （SK30）	10,280 土師器:5	坏、椀、皿	図61－243～247		
A	44号土坑 （SK44）	5,570			硯（破片1）	図69－17
A	71号土坑 （SK71）	2,690 土師器:5	器台、台付甕、台付甕	図47－7～11		
A	6号溝 （SD6）	26,970 土師器:8、須恵器:1	高坏	図58－172 図62－285～292		

出土位置		土器			他遺物	
区	遺構	出土総量（g） 実測個体数	器種概要	図版	種別 （実測個体数）	図版
A	他土坑 （SK）	115,060 土師器:21 須恵器:7 灰釉陶器:2	台付甕、坏、高坏、甕、壺、灰釉陶器、（青磁）	図47－5・6 図57－160～166 図58－167 図60－223 図61－248～256 259・261・263	石斧（1） 砥石（1） 鉄釘（1） 刀子（1） ミニチュア土器（1） 鹿角加工品（1） （人骨・獣骨）	図68－1 図68－7 図70－3 図70－6 図67－2 図73－3
A	他溝 （SD）	47,770 土師器:9、須恵器:1	坏、高坏、壺、椀	図62－283・284 図62－293～300	刀子（3） 紡錘車（1）	図70－4・5・7 図67－15
A	他遺構	2,550				
A	検出面	336,466 土師器:83 須恵器:12 灰釉陶器:2 緑釉陶器:3	台付甕、高坏、壺、皿 坏、小壺、灰釉陶器、 緑釉陶器	図53－97　図58－182 図59－184～186・ 188～191・193～ 196・204 図64－371～374 図65－377～382・ 384・386～388・390 ～432 図66－434・436～ 438・444～453・456 ～461・463・464	鉄釘（1） 砥石（5） 円石（2） ミニチュア土器（3） 土製円板（4） 土玉（1） 紡錘車（2） 土製支脚（1） 銅銭（3） 獣状骨製品（1） （人骨・獣骨）	図70－8 図68－3・5・6・8 図69－12 図69－15・16 図67－3～5 図67－8・10・ 12・13 図67－14 図67－16・17 図67－20 図72－1～3 図73－1
A区	土器合計	762,536				
B	17号住居 （SB17）	1,106 土師器:2	坏、皿	図60－221・212		
B	18号住居 （SB18）	3,048 土師器:1	甕、壺	図56－139		
B	19号住居 （SB19）	9,618 土師器:8	坏、高坏、長胴甕、甕	図56－141～148	石製支脚（1）	図69－13
B	93号土坑 （SK93）	6,628 土師器:13	壺、甕、小型壺、器台	図47－12～19 図48－20～24		
B	95号土坑 （SK95）	5,035 土師器:11	小型壺、鉢、台付甕、 器台	図48－25～35		
B	他土坑 （SK）	7,118 土師器:1	坏	図61－257	円石（1）	図69－14
B	他溝 （SD）	2,276 土師器:1	坏	図63－301		
B	他遺構	841				
B	検出面	9,267				
B区	土器合計	44,957				
C	20号住居 （SB20）	1,393				
C	21号住居 （SB21）	8,630 土師器:11	坏、高坏、甕、鉢	図57－149～159		

出土位置		土器			他遺物	
区	遺構	出土総量（g） 実測個体数	器種概要	図版	種別 （実測個体数）	図版
C	22号住居 （SB22）	1,590				
C	23号住居 （SB23）	410				
C	34号溝 （SD34）	11,130 土師器：5 灰釉陶器：1	坏、椀、皿、灰釉陶器	図63－302～307	銅製煙管（1） （獣骨）	図71
C	117号土坑 （SK117）	7,885 土師器：2	坏	図61－258・260		
C	132号土坑 （SK132）	20,433 土師器：12、須恵器：2	坏、高坏、椀	図58－171 図62－264～276	管玉（1）	図69－19
C	不明遺構1～6 （SX1～6）	25,890 土師器：18、須恵器：11	坏、高坏、甕、椀、皿	図58－117・183 図63－313～339		
C	不明遺構7 （SX7）	20,535 土師器：26、須恵器：2 灰釉陶器：3	坏、長頸壺、椀、甕 灰釉陶器	図64－340～370		
C	他土坑 （SK）	33,829 土師器：7 須恵器：4	坏、椀、皿、壺	図58－168～170 図61－225・262 図62－227～282	鉄滓（2） 砥石（2） 土製円板（1） 卜骨（1）	図70－1・2 図68－4 図69－11 図67－11 図73－4
C	他溝 （SD）	11,437 土師器：5 灰釉陶器：1 （弥生：1）	坏、高坏、甕、椀、皿 はそう、灰釉陶器	図48－36 図58－173～175・181 図63－308・309		
C	他遺構	17,551 土師器：5 灰釉陶器：2	坏、高坏、椀	図58－176・178～180 図69－310～312		
C	検出面	115,823 土師器：14 須恵器：7	甕、鉢、坏、椀、皿、 小型壺、灰釉陶器 緑釉陶器	図58－183 図59－187・192 195・202・203 図64－375・376 図65－383～385・389 図66－435・439～443・454・455・462・465	管玉（1） ミニチュア土器（1） ヘラ状木製品（1） （人骨・獣骨）	図69－18 図67－6 図73－2
C区 土器合計		276,536				

第Ⅴ章　平林東沖遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに
Ⅰ．出土人骨
　1．分析方法
　2．結果および考察
Ⅱ．出土獣骨
　1．分析方法
　2．結果および考察
　　(1)試料別出土状況
　　(2)種類別出現傾向
　引用文献

＜図表・図版一覧＞
表1．出土人骨同定結果
表2．ＳＫ７出土人骨の歯式
表3．ＳＫ８出土人骨の歯式
表4．出土獣骨検出分類群の一覧
表5．出土獣骨同定結果

図1．人体骨格各部の名称
図2．ウマの骨格

図版1　出土人骨(1)
図版2　出土人骨(2)
図版3　出土人骨(3)
図版4　出土獣骨(1)
図版5　出土獣骨(2)

はじめに

平林東沖遺跡（長野県長野市平林に所在）は、土坑や溝跡から人骨や獣骨が出土している。そこで、人骨に関しては被葬者の情報を得ること、獣骨に関しては当時の動物利用に関する資料を得ることをそれぞれ目的として骨同定を実施する。

今回、同定を行う試料は、ＳＤ６・ＳＸ２検出面・ＳＫ７・ＳＫ８で検出された人骨、検出面・ウシ埋納・土坑・ＳＫ54覆土・ＳＤ９覆土・ＳＤ34覆土・ＳＫ131覆土・ＳＸ７覆土・ＳＫ137覆土・ＳＸ1，2検出面などから採取された獣骨、合計20試料である。これらの同定試料は、１試料中に複数点の骨が含まれている場合もあり、破片数は200片以上に及ぶ。なお、遺構から出土した人骨および獣骨がいずれも平安時代に属し、検出面から出土した骨が明確な時期不明であるが古墳時代～平安時代に属するとされている。以下、人骨、獣骨に分けて報告を

行う。

Ⅰ．出土人骨

1．分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼で観察して部位の同定を行い、形態的特徴から可能な限り個体に関する情報を得る。

2．結果および考察

人骨同定結果を表１に示す。以下、遺構ごとに結果を示す。なお、出土部位の名称については、図１に示す。

＜ＳＤ６＞

右大腿骨の骨体（遠位端側）である。接合試料である。大きさから、成人と判断される。性別は不明。

＜ＳＸ２検出面＞

右大腿骨の骨体である。接合試料である。大きさから、成人と判断される。性別は不明。

＜ＳＫ７＞

前頭骨－頬骨、側頭骨－上下顎骨、上下顎骨、および遊離歯牙が確認される。前頭骨－頬骨、側頭骨－上下顎骨、上下顎骨は、土塊状である。

遊離歯牙は、乳歯と永久歯が確認される。なお、歯牙の萌出状況は、乳歯の全てと永久歯の第１大臼歯が萌出している（表２）。その他の永久歯は未萌出である。これより、本人骨は６歳程度の小児と考えられる。性別は、不明である。なお、本土坑では、ニホンジカの鹿角を加工した副葬品がみられた。

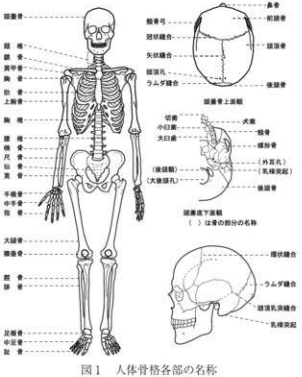


図１　人体骨格各部の名称

＜ＳＫ８＞

頭蓋は、土圧により変形・陥没しており、頭頂部周辺が残存しない。土塊の状態では左右側頭骨、左頬骨、下顎骨を確認することができ、その他に分離した骨として後頭骨が確認できる。歯牙は、遊離した状態で左上顎第１小臼歯～第１大臼歯、右上顎中切歯～第１小臼歯が確認できる（表３）。

本人骨は、後頭骨の後頭骨稜が比較的大きく、また右側で乳様突起が発達しているのが観察されることから、男性と判断される。また、下顎骨の左側大臼歯部分の歯槽が吸収しており、遊離した歯牙で象牙質が露出する程度まで咬耗が進むなどのことから、老齢に達していた可能性がある。なお、下顎骨の歯槽が吸収しており、また歯頸部に齲蝕（いわゆる虫歯）の痕跡もみられる。

＜まとめ＞

ＳＤ６およびＳＸ２検出面から出土した骨は、いずれも成人の右大腿骨の骨体であった。これらの骨がどのような過程を経て検出されたか興味深い。一方、ＳＫ７出土人骨が６歳程度の小児、ＳＫ８出土人骨が老齢の可能性がある男性と判断された。なお、ＳＫ８出土人骨は、添付された出土状況の写真をみると伸展葬であった。

表１．出土人骨同定結果

遺跡名	地区	遺構	№	種類	部位	左	右	部分	数量	備考
AHB－HO		ＳＤ６		ヒト	大腿骨		右	破片	1	接合
AHB－HO	ＣＩＫ２－２	ＳＸ２ 検出面	(A－012)	ヒト	大腿骨		右	骨体	1	接合
AHB－HO		ＳＫ７		ヒト	前頭骨・側頭骨・蝶骨		右	破片	1	土壌状
					側頭骨－上下顎骨		右	破片	2	土壌状，右Ｍ１，２
					側頭骨	左		鱗体部	1	
					上下顎骨	左		破片	1	土壌状，上顎dc－dm1， 下顎di１－dm１植立
					脳頭蓋			破片	15＋	一部土壌状
					頭蓋			破片	2	
					上顎中切歯（乳歯）	左		ほぼ完存	1	
					上顎中切歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					上顎側切歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					上顎犬歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					上顎第１小臼歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					下顎中切歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					下顎側切歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					下顎犬歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					下顎第１小臼歯（乳歯） ＋第１小臼歯		右	ほぼ完存	1	
					下顎第２小臼歯（乳歯）		右	ほぼ完存	1	
					上顎中切歯	左		歯冠部	1	
					上顎第２大臼歯	左		歯冠部	1	
					上顎犬歯		右	歯冠部	1	
					下顎犬歯		右	歯冠部	1	
					四肢骨			破片	3	
					四肢骨				2	土壌状
					不明			破片	49.1ｇ	土壌状
				ニホンジカ	鹿角			加工品	1	接合
					不明			破片	1.2ｇ	土壌状
				その他	土器			破片	7	
AHB－HO		ＳＫ８		一括	ヒト	頭蓋		破片	1	土壌状
					後頭骨			破片	1	接合
					上顎第１小臼歯	左		破損	1	歯頂部齲蝕
					上顎第２小臼歯	左		破損	1	
					上顎第１大臼歯	左		破損	1	歯頂部齲蝕
					上顎中切歯		右	歯冠部片	1	接合
					上顎側切歯		右	破損	1	歯頂部齲蝕
					上顎犬歯		右	破損	1	接合
					上顎第１小臼歯		右	破損	1	接合
					歯牙			歯冠部	5	
					歯牙			歯根部	1	
					頭蓋			破片	2	土壌状
			№1	ヒト	大腿骨		右	両端欠	1	接合
			№2	ヒト	脛骨		右	破片	5	一部接合
					脛骨		右	破片	2	土壌状
			№3	ヒト	大腿骨	左		両端欠	1	接合
			№4	ヒト	脛骨	左		破片	3	
					腓骨	左		破片	3	
					脛骨・腓骨	左		破片	1	土壌状
					脛骨／腓骨			破片	29	
			№5	ヒト	鎖骨	左		両端欠	1	接合
					上腕骨	左		両端欠	1	接合
					橈骨	左		両端欠	1	
					尺骨	左		両端欠	1	
			№6	ヒト	上顎中切歯	左		破損	1	
					鎖骨		右	両端欠	1	接合
					上腕骨		右	両端欠	1	接合
					橈骨		右	骨体	1	
					尺骨		右	骨体	1	接合
					不明			破片	1	

表２．ＳＫ７出土人骨の歯式

墓坑２		右								左							
上顎	永久歯	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
			△	◎			▲			▲						▲	
	乳歯	×	×	×	dm^2	dm^1	dc	di^2	di^1	di^1	di^2	dc	dm^1	dm^2	×	×	×
					○	○	○	○	○	○		◎	◎	◎			
下顎	乳歯	×	×	×	dm^2	dm^1	dc	di^2	di^1	di^1	di^2	dc	dm^1	dm^2	×	×	×
						○	○	○	○	◎	◎	◎	◎				
	永久歯	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
						▲	▲										

凡例）◎：植立　△：未萌出　○：遊離　▲：未萌出遊離

表3.　ＳＫ８出土人骨の歯式

墓坑2		右								左						
上顎	永久歯	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
						○	○	○	○				○	○	○		
下顎	永久歯	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

凡例）◎：植立　△：未萌出　○：遊離　▲：未萌出遊離

Ⅱ．出土獣骨

1．分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串、あるいは水に浸した筆で静かに除去する。一部の試料については、一較工作用接着剤を用いて接合する。自然乾燥後、試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いした。なお、出土部位に関しては、ウマを例として図２に示す。なお、ウマの年齢等については、西中川ほか（1991）を参考とする。

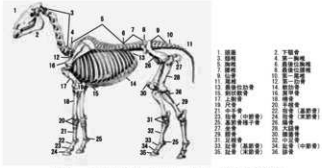


図２　ウマの骨格（加藤・山内、2003を改変）

2．結果および考察

(1)試料別出土状況

検出された種類は、鳥類がガン類の１種類、哺乳類がイヌ・ウマ・ブタ・ニホンジカ・ウシの５種類である（表４）。同定結果を表５に示し、以下に試料ごとの結果を示す。

表４．　出土獣骨検出分類群の一覧

脊椎動物門	Phylum　Vertebrata
鳥綱	Class　Aves
カモ目	Order　Anseriformes
カモ科	Family　Anatidae
カモ亜科	Subfamily　Anatinae
ガン類	*Anser* sp.
哺乳綱	Class　Mammalia
ネコ目（食肉目）	Order　Carnivora
ネコ亜目	Suborder　Fissipedia
イヌ科	Family　Canidae
イヌ	*Canis familiaris*
ウマ目（奇蹄目）	Order　Perissodactyla
ウマ科	Family　Equidae
ウマ	*Equus caballus*
ウシ目（偶蹄目）	Order　Artiodactyla
イノシシ科	Family　Suidae
ブタ	Sus scrofa var. *domesticus*
シカ科	Family　Cervidae
ニホンジカ	*Cervus nippon*
ウシ科	Family　Bovidae
ウシ	Bos taurus

＜検出面＞

ウマの左上顎第１後臼歯・右上顎第３前臼歯、ウシの右下顎第２後臼歯、ウマ／ウシの部位不明破片が確認される。

ウマ左上顎第１後臼歯は、全臼歯高65.52㎜を計り、階である。第34歳未満と推定される。ウマ右上顎第３前臼歯は、接合試料で、全臼歯高63.67㎜を計り、４歳前後と推定される。ウシの右下顎第２後臼歯は、歯冠長30.91㎜、歯冠幅19.62㎜を計り、未萌出歯牙である。

＜検出面＞

ウシの右脛骨破片で、接合試料である。骨体は縦に割れ、外側のみ残す。骨体中央で金属刃で打割されている。

＜検出面（№59）＞

ウマの右下顎第２前臼歯と左大腿骨骨頭、ウシの右中手骨遠位端、獣類の部位不明破片である。ウシの右中手骨遠位端は接合試料である。

ウマの右下顎第２前臼歯は、全臼歯高53.52㎜を計り、４歳未満と推定される。また、ウシの右中手骨遠位骨端は骨端幅54.82㎜を計る。

＜検出面（№65）＞

ブタの左大腿骨である。両端が欠損する。近位骨端は未骨化で外れる。骨体最小径21.66㎜を計測する。骨質が新しく、現代のものが混入したと思われる。

＜ウシ埋納土坑＞

ウシの左右下顎骨である。左右とも接合試料である。同一個体の下顎骨である。右下顎骨は、ほぼ完存する状態で、全長380.0㎜を計る。第１～３後臼歯が植立し、切歯と前臼歯を欠く。左下顎骨は、下顎枝が欠損し、第３前臼歯、第１～３後臼歯が植立する。骨体部の破損が著しく、また下顎枝を切断している可能性があり、直線的な折れ口をみる。また、骨体舌側面に焼けた痕跡があり、細擦痕をみる。左右とも第３後臼歯が完出直前であり、3.5歳前後と推定される。大きさは山口県萩市見島に飼養される日本在来牛のなかでの中型牛とされる見島牛に近いと思われ、体高115cm前後と推定される。

＜ＳＤ９覆土（№62）＞

ウマの右上顎第１後臼歯、獣類の部位不明破片である。ウマの右上顎第１後臼歯は、全臼歯高70.45㎜を計り、４歳前後と推定される。

＜ＳＫ54覆土（№218）＞

ウマの左上顎第４後臼歯と右上顎第２後臼歯である。ウマの左上顎第４後臼歯は、全臼歯高63.60㎜を計り、５歳前後と推定される。右上顎第２後臼歯は歯冠部に破損がみられるが、全臼歯高63.29㎜を計り、５歳前後と推定される。

＜Ｃ区ＳＸ７覆土（Ａ－022）＞

ウマの左上顎第３後臼歯、ウシの左下顎第３後臼歯である。ウマの左上顎第３後臼歯は接合試料で、全臼歯高65.95㎜を計り、３～４歳程度の可能性がある。また、ウシの左下顎第３後臼歯は、破損しており、同一歯牙の破片がみられる。未萌出歯と思われる。

＜Ｃ区ＳＤ34覆土（Ａ－006）＞

イヌの右下顎骨である。接合試料である。遠位部、下顎枝、骨体の一部を残す。第１後臼歯が植立するが、遠心端部のみ残す。咬耗が強い。なお、骨体の破損は自然破損とみられる。第１後臼歯～第２後臼歯間の骨体高25.16㎜、咬筋窩深5.54㎜を計り、雄個体とみられる。中型犬で、老齢と推定される。

＜Ｃ区ＳＤ34覆土（Ａ－007）＞

ウマの左下顎骨と破片である。接合試料である。近位骨端を破損するが、埋存時は完存していたと考えられる。未萌出の左第１切歯がみられる。第１～３乳臼歯は抜け、第１～２後臼歯が萌出し、第３後臼歯が未萌出の段後臼歯の萌出時期が４歳前後とされていることから、本ウマ遺骸は３歳前後の個体と推定される。脱落している乳歯歯槽の頬側部分が破損しているのは意図的な切断が行われているかもしれない。これは乳歯を抜くことが目的であったことも考えられる。さらに骨体に細かい切痕と思われる痕跡をみる。関節突起の欠損は若齢のために骨質がもろく、破損したものと思われる。

＜Ｃ区－２ＳＫ131覆土（Ａ－003）＞

ガン類の左上腕骨骨体、ウマ／ウシの部位不明破片である。ガン類の左上腕骨は、骨体最小径10.75㎜を計る。

＜Ｃ区２　ＳＫ131覆土　（Ａ－005）＞

ニホンジカで左基節骨・左中節骨・左末節骨、および第Ⅱ／Ⅴ末節骨である。基節骨は接合するが、破損試料である。全長46.87㎜を計る。中節骨と末節骨は、ほぼ完存する状態で、中節骨全長39.41㎜、末節骨全長39.19㎜を計る。第Ⅱ／Ⅴ末節骨は、破片である。

＜Ｃ区２－２検出面（Ａ－018）＞

ニホンジカの左橈骨遠位端部、ウマの中手骨／中足骨破片である。ニホンジカの左橈骨は、骨体～遠位骨端がみられ、遠位端骨端幅41.15㎜を計り、大型で雄個体と推定される。埋没時に手根骨が関節していたことが、骨端部の変色の異なることから推測される。なお、骨端近い表面にカットマークと囓り痕が認められる。

＜C区２－２検出面（A－013）＞

ウマの歯牙片、ニホンジカの右橈骨近位端、ニホンジカの橈骨破片である。ニホンジカの右橈骨近位端は接合試料である。骨端幅46.25㎜を計る。また、ニホンジカの橈骨片の中にも接合する骨片がみられる。

＜C区２－２ＳＫ137覆土（A－019）＞

ウシの肋骨破片である。一部接合する。卜占に使われた骨片と思われる。幅21～22㎜、厚さ2.3～2.8㎜に加工されている。両側には縦方向にすり切り、肋骨表面に細擦痕がみられ、骨格の自然面を削った痕がみられる。自

表５．　出土獣骨同定結果

遺跡名	地区	遺構	No	種類	部位	左	右	部分	数量	備考
AHB－HO		検出面		ウマ	上顎歯牙	左		M１	1	
							右	P３	1	接合
				ウシ	下顎歯牙		右	M２	1	
				ウマ／ウシ	不明			破片	4	
AHB－HO		検出面		ウシ	脛骨		右	外側破片	1	接合
AHB－HO		検出面	(№59)	ウマ	下顎歯牙		右	P２	1	
					大腿骨	左		骨頭	1	
				ウシ	中手骨		右	遠位端	1	接合
				獣類	不明			破片	1	
AHB－HO		検出面	(№65)	ブタ	大腿骨	左		両端欠	1	
AHB－HO		ウシ埋納土坑	東側	ウシ	下顎骨	左		下顎枝欠	1	接合
			西側	ウシ	下顎骨		右	破損	1	接合
AHB－HO		ＳＤ９覆土	(№62)	ウマ	上顎歯牙		右	M１	1	
				獣類	不明			破片	1	
AHB－HO		ＳＫ54覆土	(№218)	ウマ	上顎歯牙	左		P４	1	
					上顎歯牙		右	M２	1	
AHB－HO	C区	ＳＸ７覆土	(A－022)	ウマ	上顎歯牙	左		M３	1	接合
				ウシ	下顎歯牙	左		M３	4	同一歯牙
AHB－HO	C区２	ＳＤ34覆土	(A－006)	イヌ	下顎骨		右	破片	1	接合
			(A－007)	ウマ	下顎骨	左		破損	1	接合
								破片	4	
AHB－HO	C区２	ＳＫ131覆土	(A－003)	ガン類	上腕骨	左		骨体	1	
				ウマ／ウシ	不明			破片	1	
			(A－005)	ニホンジカ	基節骨	左		破損	1	接合
					中節骨	左		ほぼ完存	1	
					末節骨	左		ほぼ完存	1	
					第Ⅱ／Ⅴ末節骨			破片	1	
AHB－HO	C区２－２	検出面	(A－018)	ニホンジカ	橈骨	左		遠位端	1	
				ウマ	中手骨／中足骨			破片	1	
AHB－HO	C区２－２	検出面	(A－013)	ウマ	歯牙			破片	2	
				ニホンジカ	橈骨		右	近位端	1	接合
					橈骨			破片	6	一部接合
AHB－HO	C区２－２	ＳＫ137覆土	(A－019)	ウシ	肋骨			破片	5	一部接合，卜占骨
AHB－HO	C区２－２	ＳＸ１，２検出面	(A－014)	ウマ	脛骨	左		近位端	1	
				ウシ	角突起	左		破片	1	

然のままの骨を使っていないとみられる。勺痕部は4.19×7.29㎜、深さ0.97㎜にえぐられた長方形である。当初はこれよりもやや大きく掘られていたとみられる。勺痕は２カ所見られるのみであったが、炭化物の付着が認められ、その部分の焼けたことが予想される。

＜C区２－２ＳＸ１，２検出面（A－014）＞

ウマの左脛骨近位端、ウシの左角突起破片である。ウマの左脛骨近位端は、骨端幅70㎜前後を計る。ウシの左角突起は、前頭骨から切断され、さらに先端部を打割されている。基部前後径63.67㎜、同上下径49.05㎜を計る。

⑵種類別出現傾向

鳥類では、ガン類の上腕骨が認められた。わずかな数ではあったが、鳥類遺骸の含まれたことは興味深い。咱

乳類では、イヌ・ウマ・ブタ・ニホンジカ・ウシが確認された。この内、ブタは、二次的に現代のものが混入したと思われる。

ウマは、四肢骨から大きさを推定する資料が限られるが、唯一残された脛骨の計測資料からみると現生するウマでは小型のウマと推定される。下顎骨１点は３歳前後の個体である。遊離した臼歯の検出が多かった。歯は数点ずつが埋存していたようである。臼歯の個体関係を明らかにできる資料がないが、推定の年齢が４～５歳前後である。同一個体の臼歯もあった可能性もある。それらの埋存の状況に意図的なものがあったとすれば、意図的な歯の利用があったことも考えられる。牛馬の歯が呪術的な雨乞儀礼などに使われたことも推測される。上述した下顎骨１点についても、既述のように何らか手の加えられることもあったようである。臼歯と同じ扱いがあったのではなかろうか。

ウシでは、角突起があり、切断痕をみるので角を使っている。また脛骨を切断しているので、解体し、肉を食べることがあったのであろう。下顎骨を使った何か祭祀的な行為もあったのではないかと思われる。

イヌは中型犬で、在来のイヌでなく、古代以降に移入されたイヌであったと思われる。歯の咬耗からすればかなり高年齢であったことが推定される。

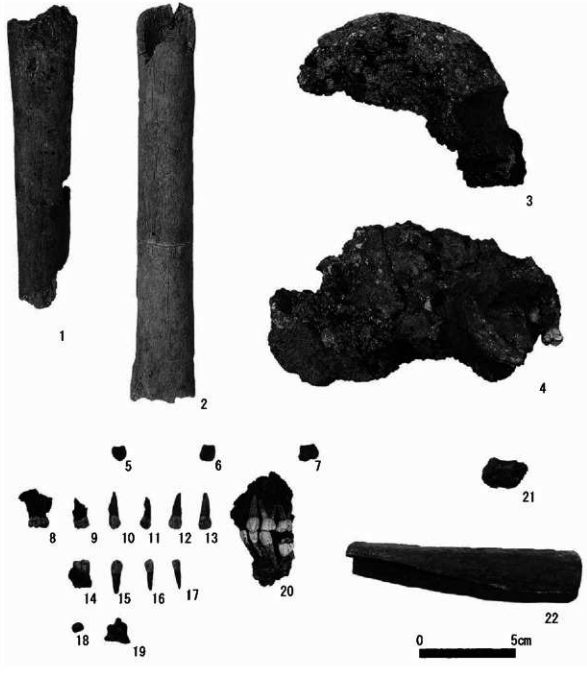
卜骨の検出は興味深いが、その素材はウシの肋骨であることが推測される。肋骨の使用例で、これまでに素材の確認例は少ないと思われる。

引用文献

加藤　嘉太郎・山内　昭二．2004．新編　家畜比較解剖図説　上巻．養賢堂．315ｐ．

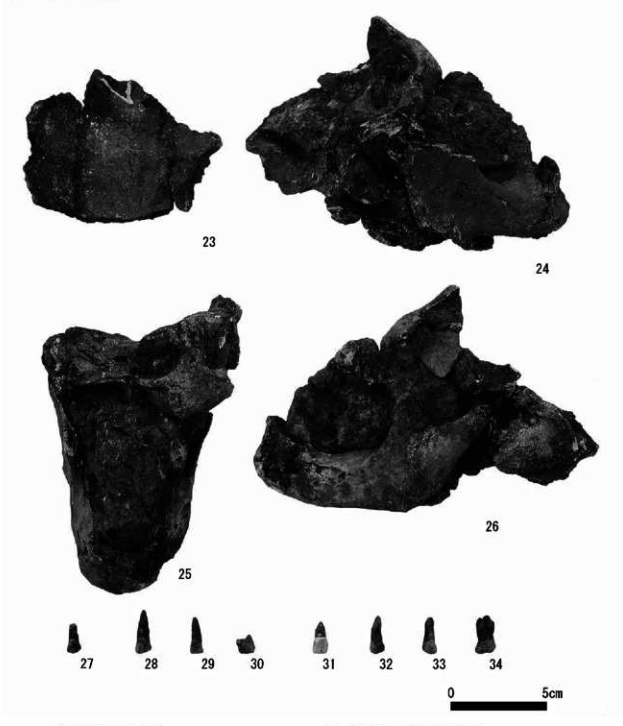
西中川　駿・本田　道輝・松元　光春．1991．古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書．99ｐ．

図版１　出土人骨（1）



1. SD6 出土右大腿骨
2. SX2 出土右大腿骨
3. SK7 出土頭蓋（前頭骨・右側頭骨・頬骨）
4. SK7 出土頭蓋（右側頭骨・上顎骨・下顎骨）
5. SK7 出土右上顎犬歯
6. SK7 出土左上顎中切歯
7. SK7 出土左上顎第２大臼歯
8. SK7 出土右上顎第２臼歯（乳歯）
9. SK7 右上顎第１臼歯（乳歯）
10. SK7 出土右上顎犬歯（乳歯）
11. SK7 出土右上顎側切歯（乳歯）
12. SK7 出土右上顎中切歯（乳歯）
13. SK7 出土左上顎中切歯（乳歯）
14. SK7 出土右下顎第１臼歯（乳歯）
15. SK7 出土右下顎犬歯（乳歯）
16. SK7 出土右下顎側切歯（乳歯）
17. SK7 出土右下顎中切歯（乳歯）
18. SK7 出土右下顎第１小臼歯
19. SK7 出土右下顎犬歯
20. SK7 出土左上下顎骨
21. SK7 左側頭骨錐体部
22. SK7 出土ニホンジカ鹿角加工品

図版２　出土人骨（2）



23. SK8 出土後頭骨
25. SK8 出土頭蓋（正面）
27. SK8 出土右上顎第１小臼歯
29. SK8 出土右上顎側切歯
31. SK8 出土左上顎中切歯
33. SK8 出土左上顎第２小臼歯

24. SK8 出土頭蓋（右側面）
26. SK8 出土頭蓋（左側面）
28. SK8 出土右上顎犬歯
30. SK8 出土右上顎中切歯
32. SK8 出土左上顎第１小臼歯
34. SK8 出土左上顎第１大臼歯

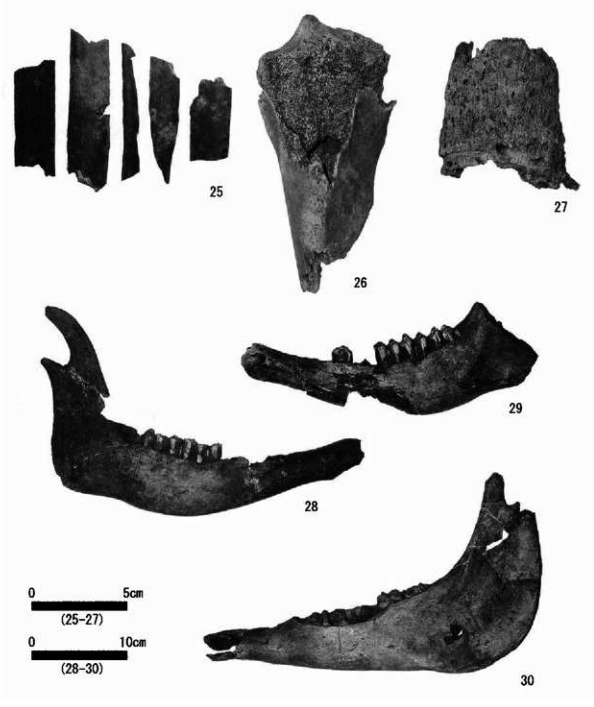
図版３　出土人骨（3）

35. SK8 出土右鎖骨
36. SK8 出土右上腕骨
37. SK8 出土右橈骨
38. SK8 出土右尺骨
39. SK8 左鎖骨
40. SK8 出土左尺骨
41. SK8 出土左橈骨
42. SK8 出土左上腕骨
43. SK8 出土右大腿骨
44. SK8 出土右脛骨
45. SK8 出土左脛骨
46. SK8 出土左脛骨
47. SK8 出土左大腿骨

図版４　出土獣骨（1）

1. ウマ左上顎第１後臼歯（検出面）
2. ウマ右上顎第３前臼歯（検出面）
3. ウシ右下顎第２後臼歯（検出面）
4. ウシ右脛骨（検出面）
5. ウマ右下顎第２前臼歯（No.59）
6. ウマ左大腿骨（No.59）
7. ウシ右中手骨（No.059）
8. ブタ左大腿骨（No.65）
9. ウマ右上顎第１後臼歯（No.62）
10. ウマ左上顎第４前臼歯（No.218）
11. ウマ右上顎第２後臼歯（No.218）
12. ウマ左上顎第３後臼歯（A-022）
13. ウシ左下顎第３後臼歯（A-022）
14. イヌ右下顎骨（A-006）
15. ガン類左上腕骨（A-003）
16. ウマ／ウシ不明破片（A-003）
17. ニホンジカ左基節骨（A-005）
18. ニホンジカ左中節骨（A-005）
19. ニホンジカ左末節骨（A-005）
20. ニホンジカ第Ⅱ/Ⅴ末節骨（A-005）
21. ニホンジカ左橈骨（A-018）
22. ウマ中手骨／中足骨（A-018）
23. ウマ歯牙（A-013）
24. ニホンジカ右橈骨（A-013）

図版５　出土獣骨（2）



25. ウシ肋骨ト占骨（A-019）
26. ウマ左脛骨（A-014）
27. ウシ角突起（A-014）
28. ウシ右下顎骨（ウシ埋納土坑西側）
29. ウシ左下顎骨（ウシ埋納土坑東側）
30. ウマ左下顎骨（A-007）

第Ⅵ章　結語

本調査においては、遺構としては古墳時代前期から奈良・平安時代までの竪穴住居等を、遺物としては弥生時代後期から中世にかけての所産によるものを確認した。遺構は竪穴住居、土坑墓、掘立柱建物、井戸などが主なものであるが、時期によって造られた遺構と遺跡内においての位置には違いがみられるものであった。

遺構存在が確認された時期は、古墳時代前期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代に大きく分けられる。まず、古墳時代前期では遺構数は僅かではあるが、土坑または井戸と見られる遺構の中からの土器の出土がみられる。井戸では一定量の土器が入れ込まれ、土坑では器台や小型土器が意図的に置かれた状態である。次の古墳時代中・後期では、17軒の竪穴住居が確認され、多くは遺跡北側（Ａ区）に集中し、南東側に行くほど数を減らしている。奈良・平安時代では竪穴住居は３軒検出されているものの、数が少ない上に古墳時代の住居よりも南に位置する傾向があることから、居住域として広く展開していたとは言い難い状態といえる。しかし住居以外では、この時期に属する土坑が遺跡の全体から検出されている。他にも用途不明ではあるが大型の掘り込みからは土器が多く出土し、土坑墓やウシの骨が埋納された土坑などが注目される。

古墳時代前期の遺構は祭祀的性格がうかがわれるもので、住居の検出がみられないことを考え合わせれば、生活域ではない場所としての土地利用が考えられる。次の古墳時代中期・後期では居住域となり、集落としては小規模ながらも、古墳時代中期から後期にかけて連続して竪穴住居が営まれており、ＳＢ16のように竪穴住居内からほぼ完形の土器が多量に出土する例もみられ、一定の期間安定的に集落が営まれていたことが考えられる。

奈良・平安時代では、僅かに竪穴住居がみられるものの、前時代と同じ様相として捉えることは難しい。むしろこの時期の特徴としては、居住域以外の土地利用のあり方を考えるべきであろう。土坑を中心とした幾つかの掘り込みが造られ、覆土中および床面からの遺物の検出が多くみられた。土器は坏をはじめ灰釉・緑釉陶器や小型品などを含んでいる。また、覆土中からの獣骨の出土が多く、ウシ・ウマ・シカなどの骨がみられた。さらに土坑・溝にはウマ・ウシが埋納され、ウシの骨を使った卜骨が出土している。

遺跡の立地の特徴は扇状地の端部に位置しており、遺跡は全体に湧水点が高く水がつき易いということである。周辺では条里的地割りがみられ、平安時代以前からの水田開発の可能性を踏まえると、本遺跡の性格を考える上においては農耕との関連が重視されるところとなる。古墳時代においての農耕祭祀に関わる遺跡が、扇状地の末端部や河岸段丘上などの湧水のある場所につくられる事例に照らせば、本遺跡も同じく扇状地末端の湧水のある場所を選んで、農耕祭祀に関わる遺構が中心的に営まれたという可能性を導くことができよう。

平安時代では他に、墨書土器、緑釉陶器、土器転用硯の出土があることから、ある程度の規模を持つ中心的な当該期の集落が遺跡の周辺に存在することが推測できる。また古墳時代前期についても、土器の廃棄（埋納）に関係した集落の存在が推測される。

本遺跡が位置する地区の周辺では今のところ集落遺跡の確認はなされていない。地形からみても遺跡が多く密集する場所とは違う様相を呈しており、基本的には集落立地としては不適な一帯と考えられる。しかし今回の調査によって、期間・規模共に限定されるものの、古墳時代から平安時代にかけての集落等の展開がなされていたことが確認されたことは特筆される。今後も、集落およびそれ以外の土地利用のあり方を含めて、周辺地の遺跡確認については注意する必要がある。

1

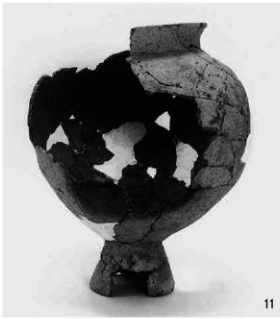
2

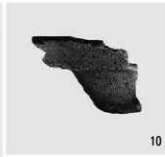
5

7

8

9


11


10

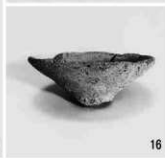
12

13

17

19

15


16

18

20

21

22

24

25

26

28

29

30

31

32

33

34

37

38

39

41

44

46

45

48

47

49

50

51

52

53

58

59

55

56

68

71

72

60

61

62

63

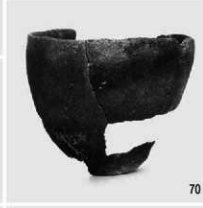
69

76

64

65

67


70

77

80

78

87

84

83

86

92

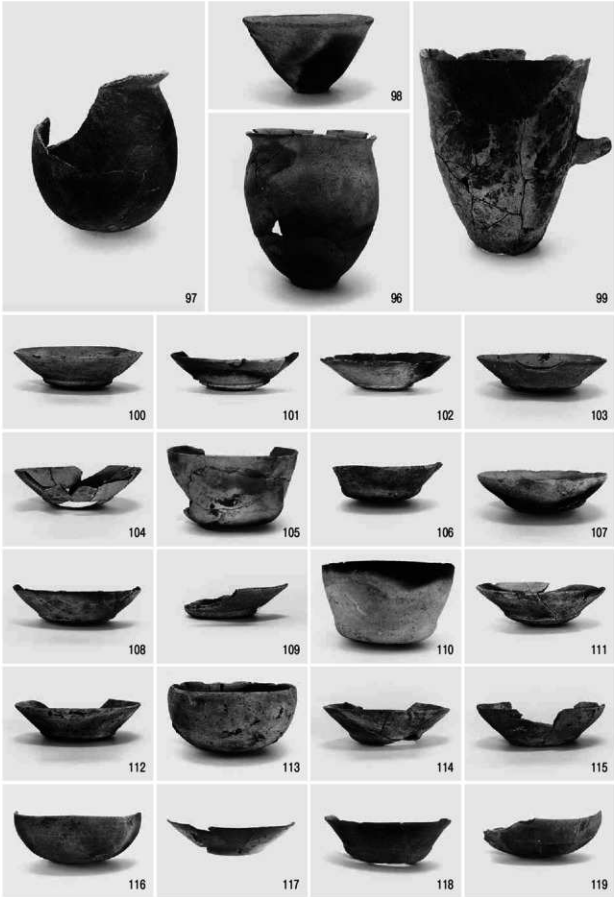
89

90

91

94

95


97
98
96
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119

120

121

122

123

124

125

126

128

129

127

135

130

132

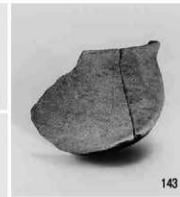
136

137

138

141

142


143

149

140

152

153

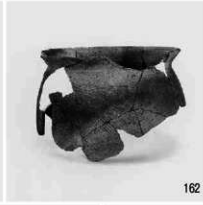
148

156

157

159

160


162

161

163

166

164

165

167

170

171

172

174

176

169

177

178

179

180

175

183

181

184

182

186

187

188

192

190

191

194

197

199

206

205

208

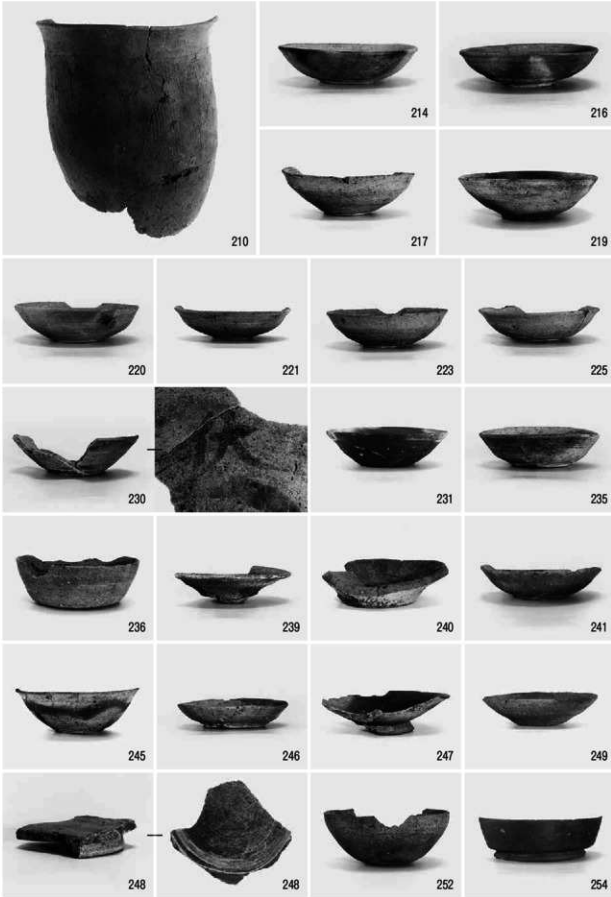
196

209

211

212

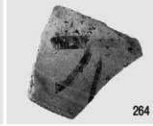
213


210
214
216
217
219
220
221
223
225
230
231
235
236
239
240
241
245
246
247
249
248
248
252
254

255

257

258


264

261

261

272

281

282

282

283

285

286

287

294

296

298

300

301

302

303

304

305

306

309

310

311

312

314

317

319

319

321

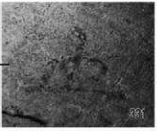
323

324

325

327

331


331

334

330

335

336

337

338

340

341

342

344

347

351

352

353

355

356

358

359

370

371

380

366

366

367

369

369

384

387

391

395

404

405

406

407

410

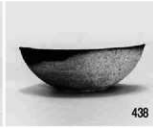
411

417

419

421

435


438

447

449

450

452

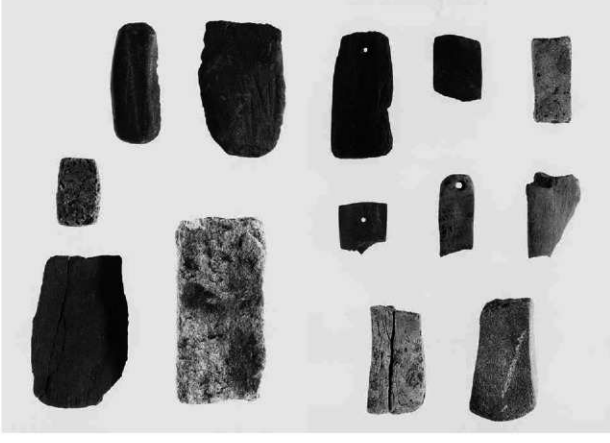
454

460

462

463

464



凹石

凹石

石製紡錘車

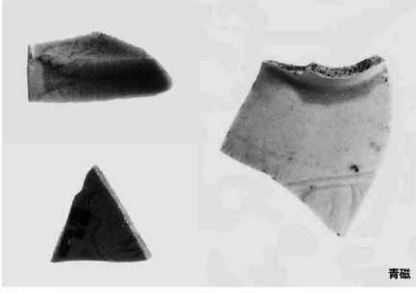
管玉

石製硯

土玉

ミニチュア土器

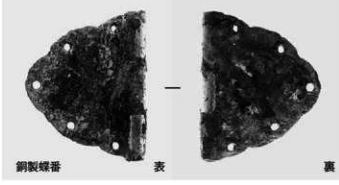
石製支脚


青磁

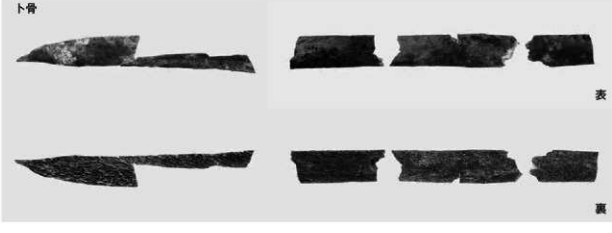
不明土製品

梯状木製品

ヘラ状木製品


銅製蝶番　表　裏

鹿角加工品



報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん　ひらばやしひがしおきいせき
書名	浅川扇状地遺跡群　平林東沖遺跡
副書名	古牧中部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第116集
編著者名	遠藤恵実子
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地　ＴＥＬ 026-284-0004・ＦＡＸ 026-284-0106
発行年月日	2007（平成19）年３月16日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
平林東沖遺跡（ひらばやしひがしおきいせき）	長野県長野市（ながのけんながのし）大字平林字東沖（おおあざひらばやしあざひがしおきいせき）301 他	20201	B－023	36′39″9″	138°12′54″	2001. 7.17～2001.11. 1 2002. 5.30～2002. 7.31 2003. 5. 6～2003. 7.18	5,290㎡	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項
平林東沖遺跡	集落	古墳時代	（前期）	（竪穴住居）1 土坑 1 井戸 1	土師器	
			（中期）	竪穴住居 10	土師器・砥石	
			（後期）	竪穴住居 7	土師器・須恵器・ミニチュア土器・土製円板 管玉・土玉・砥石	
		奈良・平安時代		竪穴住居 3 掘立柱建物 3 土坑墓 2 井戸 16	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・転用硯・墨書土器・刀子 鉄鏃・鉄釘・銅製蝶番 卜骨・鹿角加工品	

要約	浅川扇状地の扇端部に位置する。立地は扇状地の末端部、裾合谷に接する微高地で湧水が多くみられる場所であり、現在の所、周辺地での遺跡の確認がなされていない場所である。古墳時代前期から平安時代にかけての遺構が検出され、遺跡内では時期によって土地利用に違いがみられるものであった。古墳時代中期から後期には集落域として利用されているのに対し、古墳時代前期、平安時代では祭祀的な遺構・遺物の検出が特徴的である。

長野市の埋蔵文化財第116集

浅川扇状地遺跡群

平林東沖遺跡

平成19年3月9日　印刷
平成19年3月16日　発行

編集　長野市教育委員会
発行　文化財課埋蔵文化財センター

印刷　信毎書籍印刷株式会社